

心の姿の研究

石川啄木

青空文庫

夏の街の恐怖

焼けつくやうな夏の日の下に

おびえてぎらつく軌条レールの心。

母親の居睡いねむりの膝ひざからすべり下りて

肥ふとった三歳みつばかりの男この児こが

ちよこくと電車線路へ歩いて行く。

八百屋やほやの店には萎なえた野菜。

病院の窓掛まどかけは垂たれて動とかず。

閉とざされた幼稚園の鉄の門の下には

耳の長い白犬が寝そべり、

すべて、限りもない明るさの中に

どこともかく、芥子けしの花が死落しにおち

生木の棺なまきくわんに裂罅ひびの入る夏の空気のなやましき。

病身の氷屋の女房が岡持を持ち、

骨折れた蝙蝠傘かうもりがさをさしかけて門かどを出れば、

横町の下宿から出て進み来る、

夏の恐怖に物も言はぬ脚気患者かっけの葬りはうむの列。

それを見て辻つじの巡查は出かゝった欠伸あくび噛みしめ、

白犬は思ふさまのびをして

塵溜ごみための蔭かげに行く。

焼けつくやうな夏の日の下に、

おびえてぎらつく軌条れいじょうの心。

母親の居睡りの膝から下り下りて

肥った三歳ばかりの男の児が

ちよこくと電車線路へ歩いて行く。

起きるな

西日をうけて熱くなつた

ほこり

埃だらけの窓の硝子がらすよりも

まだ味気ない生命いのちがある。

正体もなく考へに疲れきつて、

汗を流し、いびきをかいて昼寝してゐる

まだ若い男の口からは黄色い歯が見え、

硝子越しの夏の日が毛脛けすねを照し、

その上に蚤のみが這はひあがる。

起きるな、起きるな、日の暮れるまで。

そなたの一生に涼しい静かな夕ぐれの来るまで。

どこ
なまめ
何処かで艶いた女の笑ひ声。

事ありげな春の夕暮

遠い国には戦いくさがあり……

海には難破船の上の酒宴さかもり……

質屋の店には蒼あをざめた女が立ち、
燈光あかりにそむいてはなをかむ。

其処そこを出て来れば、路次の口に
情夫まぶの背を打つ背低い女——

うす暗あがりに財布さいふを出す。

何か事ありげな――

春の夕暮の町を圧する

重く淀んだ空気の不安。

仕事の手につかぬ一日が暮れて、

何に疲れたとも知れぬ疲がある。

遠い国には沢山たくさんの人が死に……

また政庁おしよに推寄せる女壮士をんなさうしのさげび声……

海には信天翁あはうどりの疫病

あ、大工だいくの家では洋燈らんぷが落ち、

大工の妻が跳とび上る。

柳の葉

電車の窓から入って来て、
膝ひざにとまった柳の葉――

此処ここにも凋落てうらくがある。

然しかり。この女も

定まった路を歩いて来たのだ――

旅たび鞆かばんを膝ひざに載せて、

やつれた、悲しげな、しかし艶なまめかしい、

居睡ゐねむりを初める隣の女。

お前はこれから何処どこへ行く？

拳

おのれより富める友にあはれ懲まれて、
 或あるひはおのれより強い友にあざけ嘲られて
 くわつと怒いかつて拳こぶしを振上げた時、
 怒いからない心が、

罪人のやうにおとなしく、
 その怒いかつた心の片隅かたすみに
 目をパチ／＼して蹲うづくまつてゐるのを見付けた――
 たよりなさ。

あゝ、そのたよりなさ。

やり場にこまる拳をもて、

お前は
 誰たれを打つか。

友をか、おのれをか、
それとも又罪のない^{かたは}傍らの柱をか

青空文庫情報

底本：「日本の文学15」中央公論社

1967（昭和42）年6月5日初版発行

1973（昭和48）年7月30日10版発行

※旧仮名の拗音、促音を小書きする底本文の扱いを、ルビにも適用しました。

入力：蔣龍

校正：川山隆

2008年5月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

心の姿の研究

石川啄木

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>